

令和3年度  
広島県瀬戸内高等学校推薦入学試験問題

国語

(50 分)

..... 注 意 事 項 .....

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いて見ないこと。
2. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
3. 問題・解答用紙に落丁、乱丁、印刷不明な箇所があれば申し出ること。
4. 問題・解答用紙の指定欄の太枠内に、受験番号を忘れずに記入すること。
5. 問題・答案は試験終了後、監督員の指示によって回収するので、終了の合図までそのまま静かに着席していること。
6. 余白は自由に使って良い。

受験  
番号

--

【一】次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

かつて私は、ある地域の人々がわれ先に電車に乗り込んだり、列を無視して横入りしたり、後ろに人が並んでいるのに平気で長電話をするようなこと——簡単にいえば公德心に欠けた行為——は、その地域が経済的に豊かになり、生活に余裕が生まれた段階で次第に解消されていくものだと思っていた<sup>①</sup>。それを逆説的に証明するように、日本では年々公共マナーが低下している。だからこそここまで経済発展を<sup>a</sup>上げた上り坂の香港に対し、もしかしたらそんな無秩序も消えたのではないかと淡い期待を抱いていた。

《 i 》その点に関して、香港は変わっていないなかった。公德心と経済成長は、どうやらあまり関係がないようだ。

地下鉄が旺角駅に着いた。一〇歳くらいの痩せた男の子がドアをこじ開けるようにして乗り込んできた。少年はその小柄な体を生かして大人たちの隙間を抜け、ちょうど私が座っていた向かいのベンチにわずかに空いていた半分分のスペースを見つけた。

「お母さん、こつちこつち、席があるよ！」

小さな少年は嬉しさのあまりピョンピョン飛び跳ねたいところだが、立ち上がって誰かに席を奪われることを恐れ、尻がバネでつなげられたびっくり箱の人形のように、ピョコピョコ上下運動を繰り返した。ようやく人を掻き分けながらその他の家族が到着した。赤ん坊を背中におぶった三十代前半ぐらいの母親に、小さな女の子の手を引いた少し年上の父親。少年は、母親が眼の前まで来たのを確認すると立ち上がり、母に席を譲った。もともと痩せた少年がやっと座れるだけの隙間であり、着ぶくれした母親は尻の先端をかるうじてベンチにのせているという感じだ。しかし彼女はじりじり、じりじりと尻を押し込み、まんまとすっぽりベンチにはまりこんだ。

少年は手すりに掴まって手をできる限り延ばし、まだ満足できないように周りを見回している。

「次は油麻地、油麻地」

私の側のベンチの乗客が二人立ち上がった。前に立っていた男が「楽勝だ<sup>③</sup>」という余裕の面持ちで腰かけようとしたその瞬間、少年がその席に滑り込んだ。男が呆気にとられて少年を見つめる。気をとりなおして少年の横に座ろうとすると、少年は片足をベンチの上上げ、勝ち誇った顔で「先約があるんだ」といった。

「お母さん、ほら、こつちこつち！」

母親は立ち上がってこちらへのこの移動する。父親は座席を求めて少し離れたドア近くに立っていたが、その声を聞きつけ大急ぎで戻ってくる。そしてベンチに腰かける時、「叻仔！」<sup>②</sup>といって息子の頭を撫でた。

「次は佐敦、佐敦」

さつきまで母親が座っていた向かいのベンチの三人が立ち上がった。今度は父親も母親もほぼ同時に立ち上がり、たった一メートルほどの距離を走った。赤ん坊をしょった母親、小さな娘をひざにのせた父親、そして少年は記念写真でも撮るように満面の笑みを浮かべてベンチに勢ぞろいした。

半人分の席から始め、この家族はたった二駅分の距離の間に、家族全員が座れるだけの居場所を確保したのである。そして獲得に貢献した息子は、「叻仔」という、親から子供に対する最上級の賛辞で賞賛された。

④ 私がもしろいと思つたのは、この家族が一つを得ても現状には決して満足せず、常により良い条件を求めて全員で移動し続ける点だった。一番身軽な長男が先頭に立ち、家族の利益を追求し続ける。彼は自分のためではなく、家族のために働いていた。まず母親を、次に父親を座らせるところなど、彼は典型的な孝行息子だった。そして決して競争率の低くない I で満足できる結果を残した息子は、親から賞賛される。これは香港のリソウテキな家族のありようでもあった。

誰が何といおうと、周りの人がどんなに眉をひそめようと、欲しいものを手にした彼らの II である。

先を争うことを広東語では「爭先恐後」という。先を争い、人より後になることを恐れる。そこまで先にこだわるのは、他の誰かに自分の場所を奪われるという恐怖があるからだ。何故なら、自分もそうやって居場所を築いてきたから。地下鉄で繰り広げられる闘いは、そのまま、この街で生きる闘いの縮図なのだ。

「次は尖沙咀、尖沙咀」

私はまだ感動に酔いしれているというのに、その家族はすつくと立ち上がり、小走りでプラットフォームへ降りて行った。たった三駅のために、そこまで闘っていたの？

拍子抜けした。

たった三駅でも、より良い場所へ移りたいという欲望を実現せずには済まなかったのだろうか。

《 ii 》、済まないのだろう。

敗北は癖になる。いつも敗北していると、人間は敗北することに慣れ、闘う意欲を失ってしまう。それが三駅であれ、一生であれ、勝利に執着すること。その習慣が、大事な時の勝利につながる。電車の中の闘いは、いざという時のための予行演習なのだろう。この街で穏やかな心で電車に乗ることは、多分もともと無理な相談なのだ。

「次は金鐘、金鐘。港島線へお乗り換えの方は向かい側プラットフォームでお乗り換え下さい」  
プラットフォームに降りてから、自分が尖沙咀で降りるはずだったことを思い出した。

問一 ｛ a ｝ d のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二 《 i 》 《 ii 》 に補うべき語として最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

ア しかし                   イ またも                   ウ 逆に                   エ きつと

問三 I ・ II にあてはまる語をそれぞれ漢字二字で文章中から抜き出して書きなさい。

問四 ① 「それを逆説的に証明するように、日本では年々公共マナーが低下している。」とありますが、「それ」は何を指しますか。

その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 国の経済状況が良くなれば、その国の人々の公共マナーも自然と良くなること。

イ 国の経済状況が悪くなれば、その国の人々の公共マナーも自然と低下すること。

ウ 周りから手本になる人間が減れば、その国の公共マナーも自然と低下すること。

エ 日本を除くアジアの多くの国々では、公共マナーが良くなってきていること。

問五 ② 「満足」とはここでは具体的にどのようなことを指しますか。解答欄にあうように文章中から二十字以内で抜き出して

書きなさい。

問六 ③ 「楽勝」とありますが、男は何に対して「楽勝」だと感じていましたか。十字以内で書きなさい。

問七 ④ 「私がおもしろいと思ったのは、この家族が一つを得ても現状には決して満足せず、常により良い条件を求めて全員で

移動し続ける点だった。」とありますが、筆者はこの家族が「移動し続けた」理由をどのように考えていますか。その説明として

最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 昔から香港では、とにかく人よりも先に行動するほうが良い結果が得られるという考え方が根強く残っているから。

イ 昔から香港では家族の結びつきが非常に強く、たとえ短い時間でも家族全員が一緒にいるべきであるという考え方があるから。

ウ どんな小さなことでも自分が望むものを手に入れるための努力を怠ってしまうと、大切なときも妥協するようになってしま

まうから。

エ どんな小さなことでも自分の望むものが手に入らないと敗北した記憶が残り、嫌な気持ちを残したまま日々を過ごすこと

になるから。

問八 ⑤ 「地下鉄で練り広げられる闘いは、そのまま、この街で生きる闘いの縮図なのだ。」とありますが、「地下鉄で練り広げ

られる闘い」のどのような点が「この街で生きる闘いの縮図」だと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～

エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 自分たちの家族以外はみな他人であり、家族だけを信用して行動していく必要があるという点。

イ 長男が家族のために犠牲を恐れずに行動することによって、家族全体が大きな恩恵を受けることができるという点。

ウ 自分が望むものを手に入れるためには、良心が痛んだとしてもずる賢く上手に行動しなければならないという点。

エ 自分が望むものを手に入れるためには、周囲にどう思われようと人より先に行動しなければならぬという点。

問九 電車に乗った少年の家族は全員で何人家族でしたか。解答欄にあうように漢数字で書きなさい。

問十 文章の内容から、少年が家族のために行動して席を確保したと確実に判断できる区間を次のア～エの中からすべて選び、その記

号を書きなさい。

ア 旺角～油麻地 区間

イ 油麻地～佐敦 区間

ウ 佐敦～尖沙咀 区間

エ 尖沙咀～金鐘 区間

【二】 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

「僕」は友人の山下とスパークスという漫才コンビを組んでいたが、低迷が続き解散することを決める。この場面は、スパークスが最後の漫才を終えた直後である。

僕は小さな頃から漫才師になりたかった。僕が中学時代に相方あひかたと出会わなかったとしたら、僕は漫才師になれただろうか。漫才だけで食べていけるカンキョウaウaを作れなかったことを、誰かのせいにするつもりはない。世間からすれば、僕達は二流芸人にすらなれなかったかもしれない。だが、<sup>①</sup>「俺の方が面白い」とのたまう人がいるのなら、一度で良いから舞台上iがってみてほしいと思った。「やつてみる」なんて偉そうな気持など微塵みじんもない。世界の景色が一変iすることを体感してほしいのだ。自分が考えたことで誰も笑わない恐怖を、自分で考えたことで誰かが笑う喜びを経験してほしいのだ。

② 必要がないことを長い時間をかけてやり続けることは怖いだろうか？ 一度しかない人生において、結果が全く出ないかもしれないことに挑戦するのは怖いだろう。無駄なことを排除するということは、危険を回避するということだ。臆病でも、勘違いでも、救いようのない馬鹿でもいい、リスクだらけの舞台に立ち、常識を覆すことに全力で挑める者だけが漫才師になれるのだ。それがわかっただけでもよかった。この長い月日かけた無謀な挑戦によって、僕は自分の人生を得たのだと思う。

吉祥寺ハーモニカ横丁の美舟に行くのは随分と久しぶりだった。二階に続く急な階段が懐かしかった。二階の座敷には人が溢れていた。小さなテレビの横に置かれた招き猫もまだあった。僕の目の前には神谷さんが座っていて、肉芽をつつきながら焼酎の水割り※3を呑んでいる。

「スパークスの漫才めっちゃ面白かったな」

神谷さんは、嬉しそうにそう言うと言とうと焼酎を一気に飲み干した。

「神谷さん、泣いてたでしょ？」 思い出すと笑えてくる。

「確かに泣いたけど、あんな漫才見たことないもん。あの理屈っぽさと、感情が爆発すること、しそうな二つの要素が同居するんがスパークスの漫才やな」

神谷さんは僕の方を見ずに太い声を出した。

「誰も笑ってませんでしたけど、神谷さんに褒められるのが一番嬉しいです」

これは紛れもない僕の本心だった。

「毎回、出てきていい話はつきりする漫才師が一組だけおつても面白いと思うんやけどな。そんなん見たいもん」

神谷さんは、呑み始めてからずっと僕のことを褒めてくれていた。あの頃と同じように、安い惣菜達が僕等を癒してくれた。<sup>ii</sup>  
④ 谷さんに何かを謝らなければならぬような気がしていた。

「神谷さん、すみません」

神谷さんは、特に返事もせず美味しそうに肉芽を食べている。神谷さんは漫才を辞める僕のことをどう思うだろうか。神谷さんは生れ時から死ぬまで自分は漫才師であると公言するような人だから、スパークスが解散したとしても僕が芸人を辞めることなんて考えてもいないのではないか。たとえ幻滅されたとしても、一番世話になった神谷さんに、話さなければいけない。逃げてはいけない。

「神谷さん、僕まだ何やるかは決めていないんですけど、芸人辞めようと思ってます」

「うん」

神谷さんは、ヤワらかい表情で僕を見ている。店が騒がしくてよかった。

「もう、決めたんやろ？」

「はい。僕、山下としか出来ないんで。あいつが辞めるって決断したということは、そういうことやと思っんです」<sup>⑤</sup>

僕は神谷さんの優しい声に弱いのだ。神谷さんと毎日のように遊んでいた濃密な日々があつて、僕は今日まで漫才師でいられたのだなと強く思った。神谷さんとの出会いは、僕にとって本当に幸運だった。師匠の神谷さんに相談もせず、違う世界に行くという決断をしたことを後悔はしていない。神谷さんのおかげで、僕は早口で話すことを諦められた。不良でないことを後ろめたくも思わなくなった。神谷さんから僕が学んだことは、「自分らしく生きる」という、居酒屋の便所に貼つてあるような単純な言葉の、血の通つた激情の実践編だった。僕は、そろそろ神谷さんから離れて自分の人生を歩まなければならない。

(又吉 直樹『火花』より)

※1 美舟 — 「僕」がよく通つた居酒屋。

※2 神谷さん — 「僕」が尊敬する先輩芸人。

※3 肉芽 — 山芋のつるの部分煮熟した料理。

※4 幻滅 — 自らの期待と違つてがっかりすること。

問一 { } a ~ d のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二 次の一文は文章中のどこに入れるのが適当だと考えられますか。あてはまる箇所の前前の五字を抜き出して書きなさい。

ましてや、時代のせいにするつもりなど更々ない。

問三  にあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 両立                    イ 変化                    ウ 敵対                    エ 矛盾

問四 …… i 「世界の景色が一変することを体感してほしいのだ。」・ ii 「あの頃と同じように、安い惣菜達が僕等を癒してくれた。」

という一文において用いられている表現技法として適当なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

ア 直喩                    イ 隠喩                    ウ 擬人法                    エ 倒置法

問五 — ① 「だが、もしも『俺の方が面白い』とのたまう人がいるのなら、一度で良いから舞台上が上がってみてほしいと思った。」

とありますが、この言葉にはどのような思いが込められていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、

その記号を書きなさい。

ア 舞台上がることによって、自分たちがどれほど難しいことに挑戦していたかということに分かってもらいたいという思い。

イ 舞台上がらないと芸人の気持ちや想像できるわけがないのに、好き勝手に意見を述べる人々が多いことを非難する思い。  
ウ 舞台上がれば芸人の喜びや悲しみを感じることができると、ぜひ一人でも多くの人々に舞台の素晴らしさを経験してもらいたいという思い。

エ 舞台上がれば想像を超えるような喜びや悲しみがあり、その感覚は実際に経験しないと誰にも分からないという思い。

問六 ———— ② 「必要がないことを長い時間をかけてやり続けることは怖いだろう？」とありますが、「必要がないこと」を具体的に言い換えた表現を解答欄にあらうように文章中から十二字で抜き出して書きなさい。

問七 ———— ③ 「人生を得た」を具体的に言い換えた表現を文章中から七字で抜き出して書きなさい。

問八 ———— ④ 「僕は神谷さんに何かを謝らなければならないような気がしていた。」とありますが、「僕」はなぜそのような気がしていたのだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 自分が一生芸人であると公言するような神谷さんに芸人を辞めることを伝えると、怒られることはわかりきっており、嫌なことは早めに済ませたほうが良いと考えたから。

イ 自分が一生芸人であると公言するような神谷さんに芸人を辞めることを伝えると、神谷さんを裏切ったことになるのではないかと感じ、申し訳なく思えたから。

ウ 今まで「僕」の面倒を見てくれ、金銭的な援助までしてくれた神谷さんに対し何の恩返しもせずに芸人を辞めることが申し訳なく思えたから。

エ 今まで「僕」を助けてくれ、スパークスを誰よりも面白くと言ってくれた神谷さんに対して、これ以上漫才を見せられないことに罪の意識を感じたから。

問九 ———— ⑤ 「そういうこと」とは何を指しますか。文章中の語句を用いて十字程度で書きなさい。

問十 ———— ⑥ 「『自分らしく生きる』という、居酒屋の便所に貼ってあるような単純な言葉の、血の通った激情の実践編」を言い換えた表現を文章中から十五字以内で抜き出して書きなさい。

問十一 次の会話はこの文章について話し合った生徒の会話である。文章の内容を正しく解釈していると思われる生徒の発言を次のア～

エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア (Aさん) 「なんだか切ない場面だったな。『僕』はやっぱり漫才師に対する未練が大きいと思う。最初の『僕は小さな頃から漫才師になりたかった。』って表現に漫才師を続けたかったという心残りの大きさを感じる。」

イ (Bさん) 「そうかなあ。私は『僕』の言葉から、やることはやったという満足感を感じる。夢だった漫才師にもなれて、神谷さんという尊敬できる先輩にも会えたことで『僕』は次の世界へ前向きな気持ちで進めるんだろうな。」

ウ (Cさん) 「たしかに満足感はあるかもしれないね。でも、その満足感は神谷さんという支えがあって成り立ったものだと思う。だから今の『僕』は神谷さんから離れることに関する不安な気持ちが大きいんだと思う。」

エ (Dさん) 「私は『僕』と神谷さんの関係を素敵な師弟関係だと感じた。お互いが支えあって一つの目標に向かって全力で努力したという過去があるから、これからも二人の師弟関係は変わらないと思う。」

【三】 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

伊予入道は、幼きより絵をよく書き侍りけり。父、うけぬことになん思へりける。むげに幼少のとき、父の家の中門の廊の壁に、土(気に入らない)

器の破れにて、不動の立ち給へるを書きたりけるを、客人(まらうど)、たれとかやたしかに聞きしを忘れにけり、これを見て、「たが書きて候ふ(誰かというのを)」<sup>①</sup>

にか。」と、おどろきたるけしきにて問ひければ、あるじうち笑ひて、「これはまことしきものの書きたるには候はず。愚息(まともな)の小童が書

きて候ふ。」と言はれければ、いよいよたづねて、「しかるべき天骨とは、これを申し候ふぞ。このこと制し給ふことあるまじく候ふ。」<sup>③</sup>

となん言ひける。げにもよく絵見知りたる人なるべし。<sup>④</sup>

〔古今著聞集〕より

問一 …… 「言はれけれ」の主語を文章中から抜き出して書きなさい。

問二 —— ① 「これ」とは何を指しますか。文章中から抜き出して書きなさい。

問三 —— ② 「おどろきたるけしき」とありますが、なぜおどろいたのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 壁に土器の破片で描かれた不動明王の絵がすばらしい作品だったから。

イ 土器の破片で描いた自分の絵が他人の家の壁に大事に飾られていたから。

ウ 長年探し求めていた自分が幼いころに描いた絵を見つけたことができたから。

エ 壁に飾ってある絵が幼いころに夢に出てきた絵とそっくりだったから。

問四 —— ③ 「このこと」とは何を指しますか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 絵を公開すること。 イ 絵を習うこと。 ウ 絵を購入すること。 エ 絵を描くこと。

問五

——④「絵見知りたる人」とは誰のことですか。文章中から抜き出して書きなさい。

問六

文章の内容と合致するものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 伊予入道の父は絵が下手な息子をかawaiiそうに思い、客人に指導を依頼した。

イ 伊予入道は幼いころからよく絵を描いており、客人にその才能を評価された。

ウ 客人は伊予入道に絵の才能があることを知り、直接出向いて弟子入りした。

エ 客人は飾られていた絵のあまりのひどさに腹を立て、あるじに注意した。